
勇者よ、早く来やがれ！あ、いや来てくださいお願いします。

R_iz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者よ、早く来やがれ！あ、いや来てくださいお願いします。

【Nコード】

N4522U

【作者名】

R
i
z

【あらすじ】

異世界から『勇者』を呼ぶ召喚師という役職に就いちゃいました…正直辞めたい。だって異世界ですよ？異世界。無理無理。え？成功させるまで休みなしとか…マジ？えー。……そんな感じで頑張るしかない召喚師のお話です。

召喚師の仕事風景的な（前書き）

気晴らしに書きちゃったお話です。更新はホント気分次第です。

召喚師の仕事風景的な

特殊な技法により積み重なった石はその境を見せることなく、真っ白な壁に。

ただ一面には無駄に大きな扉がある。

鍵は外側から掛けられていて頑張れば内側からも開けられるがそうすると

鍵の弁償代がその日のうちに届くであろうから、自分から開けることはない。

床と天井は仄かに発光し幾学的な模様が浮かび上がる。

まるで息をするかのように明かりは揺らぎ、そして消えまた灯る。

「……………」

そんな荘厳で、神秘的な部屋だがなによりも目を引くのはそれらではなく

中央にある『噴水』だろう。

床に穴が開いているわけでもないのに湧き出る水はナカから光が漏れ、弾けた一滴まで

漏れ出る光によってこの部屋は十分すぎる光量を得ている。

おかげで窓のないこの部屋も誰もが印象を良く持つてくれている。

荘厳で、神秘的で、幻想的。

湧き出た水は弾けて流れて、やがて床の幾学的な模様に沿って進み、そして染み込むように

消えていくのだ。

「……、よっと」

どんなシステムなのか原理なのか演出なのかはわからないがそれによつて床が水浸しになるわけではない。

現にさっきまで床に転がっていた私は濡れていない。

まあ実際にこの部屋にいる人間の感想としては：視覚にて確認できるが目を閉じると温もりを内包する風が身体を包みこんでいるようで大変気持ちいい。気持ち良すぎて寝てしまいそうだがお仕事をしなくては。

「あーあー、テステス。」

うむ、声の調子良し。

足元に転がっていた杖（友人作）を右手に持ち、軽く身体を動かして準備おk。

バツと杖を泉に向ける。

「古来より受け継がれし『門』^{モン}を組み込まれた輝石^{キセキ}よ我が願いをお聞きたまえ！

望むは『紋』^{モン}の証を持つ者！ 彼の名は軌跡^{キセキ}により定められし者！

今の時をもって奇跡^{キセキ}の理を顕現したまえ！
円環儀式^{アンロック}による解除鍵^{イゲート}！！」

泉から、幾学的模様から、あつというまに光が視界そして音さえも
圧倒し埋め尽くす。

「……」

数秒後、いや数分後かもしれない。
何度やっても慣れないこの時間はひどく心臓に悪い。

ドクンドクンと自分のナカで打つ鼓動は外にも伝わっていきそうで居
心地悪くて
空いている左手で抑える。
そうして無理やり息を細かくし続けると、ようやく光が晴れる。

成功か、失敗か。

「…あ。」

視界の先に見える小さな影に一瞬身体を固めるが、親しみの感情が
感じられる声が
耳元で囁く。

「ああ！！」

早くお知らせしなければ！

私は杖を放り投げるとその小さな影を大事に手で包み込むと「おり

やあああ！」と扉に

一撃の跳び蹴りをくらわせ道を開放し、部屋から走り去った。

鍵の弁償？

あ。忘れてた。テへ。

召喚師の日常風景的な

私が異世界から『勇者』を召喚することになってそれから毎日1日3回、

召喚の儀式を行っている。

朝昼晩。

食事の前の運動 な感じで行われている召喚は大変面倒だ。

その気になれば5回6回と出来るのだが召喚の術は部屋の泉に集まってくれている

精霊さんをお願いしているので、あまり彼らに頼ってしまうのはよくない…ということから3回ということになっている。

朝は決まった時刻になればパチ、と目が覚める。

寝起きは良い方で年に一回の大ボケの日を除けば起きてすぐに勉強もお祈りもできる。

今はストレッチをして体をほぐし、杖（友人作）で素振りをすれば準備完了。

召喚の儀式を行う。

で、その結果報告のため部屋から出してもらい上司の監視の下報告しながら朝食を食べる。

次の昼前の召喚の儀式まで空いているので扉の守りをしてくれている衛士の訓練風景を

見ながらぼーっとして過ごす。

時間になったら彼と部屋に向かい、召喚の儀式を行う。

さてここからが問題なのだ。

朝から昼に比べ、昼から夜は時間が長い。

またもや衛士にくつついていくのは彼に悪いし、前に1度やった皇太子殿下のお話相手なんか

やっつけられねえ。あ、いややっつけられるか。

とはいっても図書館で本を読もうが庭を散歩しようが必ず監視が付くので(逃亡前歴有)

結局、部屋の中でお昼寝がココ最近常習化している。

でもなあ昼寝すると夜寝付きにくいんだよな…はあ。

寝床は勿論あの部屋の中。毛布も枕も持ち込み済みなので寝床としては最高。

は。そんな話じゃないどうやって時間を潰すかだ。

「うーん…どうしよっかな…」

部屋に押し込められてからというのも独り言が多くなった気がする。

確かにこの部屋は居心地良いけれど音がなくて…また話が逸れた。いけないいけない。

うーんと悩んでいる私に肩にトン、という馴染みある衝撃が。

そしてそこから囁かれる声に耳を傾けると…

「……………」

ポン。

ああそれ、面白そう。

∴ 数時間後。

『召喚師搜索願』が発令された。

皇太子殿下のお悩み

女神ルーの導きと呼ばれる人間対魔国の戦争終結から3年。

戦争の後処理が粗方終わりこれで平穏な日々になるかと思いきやそうでもなかった。

その突然の報せというか我儘というか俺ひんぬー好きじゃねえしとか…あ、俺疲れてる。

「はぁ…」

目頭を軽く揉み解しつつ自然とため息が出た。

ラマ歴561年、陰の新月3巡りの4日目。

ローサライド王国皇太子であるヴァレンフォード・レイ・キスイラ・ユ・フェストは
自分の執務室にて、頭を悩ましていた。

悩みというのはそりゃあ勿論自分が抱える政務もそうだが、魔界の門を閉じた

生きる英雄である父：本人曰く属性：戦士、がその本来すべき仕事を成人したばかりの

自分に押し付けたオカゲで歳の離れすぎた狸爺ども相手に毎日執務しなければならぬ。

…まあ色々思う所はあるが自分の生まれを考えれば、耐えるべきだしその苦勞も
多少は受け入れられる。
つまり。

悩みはまだ他にある、ということだ。

今年の陽の新月8巡り5日目。

執務室で小休憩として茶を飲んでいた時だった。

ドアの外が騒がしく、慌てたような足音と声が近づいているのを感じた俺は

ティーカップを下ろしてやってくるであろう人物を待ち構えた。

カツカツカツ…ガチャン。

「ワタシ我の婿になる男はここか？」

「は？」

入ってきた人物をガン見する。

見た目は16歳くらいだろうか？

背丈もその相応な程度でそこだけだと平凡な感じだが…明らかに一般人じゃない。

濃厚な魔力の匂いが溢れ出ていて魔術師ではない自分でも感じるのだ、これで一般人なら

攫ってでもアカデミーに放り込む。

色素が薄く白銀のような金を纏うような髪を濃紫のリボンで結いあげ、蝶々結びの

流したリボンは髪に絡ませてどこかで見た人形のような髪型だ。

服装は身体のラインをはっきりさせるものでリボンと同色を基本とし、華やかな装飾が

各所に施されたそれはひどく似合っていた。

そこから下。スリットの入った膝丈までの裾に、二ソックスにロングブーツ。

全てが品が良い。

一部表現に差があるだろと思われるかもしれないが、
だが言わせてくれ。

「…酷過ぎるだろ」

そのまな板胴体。

「は？」

皇太子殿下のお悩み（後書き）

…ようやく国名とか人物名とか出せました。主人公じゃないけど。

衛士の憂鬱

駆けてはいけないはずの廊下。

しかしそうは言っていられない状況に小走りになる。すれ違う同僚からは同情の眼差しが。

… 全くもって不愉快だ。

どうせ上辺だけだし理解はしない、できないであろうから最初から無視すれば良いのに。

いけない。

そんな態度をとれば彼女が悲しむのだ。

… 自分にはよっぽど此方の方が理解できないのだが。

笑ったような泣いているような表情が自然と頭の中で浮かんできて苦笑する。

だけどそれもこの扉まで。

心の中でセリフを反復させ一息を吐く。

「失礼します」

ああこの、皇太子殿下執務室にイイ思い出がない。

あの時も、だ。

上司に「お前さんご指名だ」と言われたので仕方なく向かった。

そしてあの時も同じように「失礼します」と踏み入れたのだ。

自分の所属名を名乗ろうとしたら… なんとというか名乗っても意味がないと思った。

というのも確かあれば皇太子殿下、と見知らぬもう一人。
その2人がというより見知らぬ人の方が一方的に喚いているだけな
んだが。

そのため自分が名乗っても無駄だと判断。ってかどうしたら良いの
だろう。

突っ立っていても仕方ないので隅っこに気配を薄めている護衛騎士
に声をかける。

彼曰く。

戦争終結と同時に結ばれた『共生宣言』に準ずる同盟をより堅固な
ものにするため、
国王の息子である殿下と魔国総統帥の一人娘を結婚させることをが決
定。

それを知らぬ皇太子殿下の元に婿がどんなのかを見に来た一人娘。
で、今に至る。

「ワタシ我は今年で126歳になるのだ！ それを…！」

「え、それって『ババア』てこと？ まな板ババア…ないわーマジ
でないわー」

「人間の基準で考えるでない！ 100年以上生きた魔人は一人前、
成人であるのは
才主知っておろう！」

「そりゃあ当然。でも未成年であろうが成人であろうが…ないわ
ーそのまな板」

「まな板まな板と…私の肉体は包丁なんぞ当ててもビクともせんか
らまな板の機能を
成していようが」

「マジで？」

「んなことでないのは我だって気付いてるわ！！ 父上の友人であ

る才主の父親といい

嫌味たっぷりな魔術師といい…そんなのとそっくりな才主が私の婿なんぞ…あーもう!!!」

「…え？」

キィ ツと地団太を踏む魔国のお姫サマに、それまで「まな板」発言連発の皇太子が突然
フリーズした。

状況は理解していたが流れがわからない。

「なあどうということになってんですか？」

そう隣の護衛騎士に聞いてみるとおそらく、と前置きを置いてこう言った。

「父親の国王と兄の魔術師の一行が4巡り程前に『魔王ダチに会ってくる』と

紙一枚の置き手紙残して姿を消してしまいました…全ての執務が殿下に集中している

現状で溜め込まれている疲労のせいで魔国の姫の第一声の婿発言を聞き逃している

それを今気が付いてフリーズした、でしょうか」

やはり騎士は優秀だな、と思った。マジですごい。

「…もう決定済みなのか？ 婚約って」

「は？ そもそも同盟を築いた時互いの王族が婚姻を結ぶことは父上も了承しておる。

才主だつて人間の諸国を代表する大国の王族なのだ、婚姻がどのようなものかは

理解しとるだろう？ 何だ聞いていないのか？」

「初耳だし…っていうかまな板っ娘…」

「だーかーらー！ まな板煩いわ！ 我の名はシファンリーナ！！
魔国の大王の一人娘じゃ！！」
「えー」

護衛騎士と隅っこに気配を消しているが…何だか自分の仕事をこなすのが果てしなく感じた。

ちなみに先ほどぼそりと「疲れのせいで殿下、ネジ緩んでます」と呟かれた。

護衛騎士よ、主人にちっさなフォローだが流石だ。マジどうでもイイ気がする。

しかしこのまま（未）夫婦漫才を続けられると自分に課せられた役目が果たせない。

「…仕方ない」
そう言っつて踏み込んだ。

「失礼します。 皇太子殿下、 魔術師ポールロウラ様からの書状をお持ちしました」

嫌味たらしで皇太子殿下の実兄、 からのお手紙です。

本日は勉強会、ということ。 (前書き)

ほぼ会話文。そしてほぼ設定的な会話文。

本日は勉強会、ということぞ。

本日は1巡りに1度の勉強の日。

この日だけは3回の召喚儀式が朝の1回だけでイイと言われている。起床、素振り、そして召喚儀式を終えた私はこの日だけ先生となる彼お手製のお弁当をもらい、青空教室が開かれる。

「はいじゃあ、始めますよ」

勉強机はなくてただ単に服が汚れないために防水加工された大きめな布を地面に敷き、

教科書と筆とノート代わりに紙の束。

彼の方は先生役のためノートはない。

その代わりに色々と書き込まれ手に馴染むほど擦れた教科書。

私の重しがないと閉じてしまう教科書と比べると別物と勘違いするだろう。

ま、召喚儀式の建物の横：人目に付かない場所での青空教室はうるつく妖しいヒト

くらいしか訪ねてこないだろう。

「はいそこー。早速意識を外にやらない」

「いて」

デコピン一発。

「本日は本来なら3章をやりたいところですが、ちょっと『常識』の前章を掘り下げましょうか」

「何ででしょうか？」

「それはアナタが『常識知らず』だからに決まっているでしょーが」
…酷過ぎませんか？

「『太陽神フアンドラと月の女神ルーネの恵みにより、地の化身マ
ラヲレが誕生し

大地に命が息吹いた。』」

「最初の命は？」

「世界と繋がる大精霊と、大地の息吹による…ちっちゃい精霊」

「何とか及第点、というところでしょう。正しくは大地の息吹に
よって芽吹いた

『始祖の自然』^マを守護する守護精霊ですね。アナタの言うちっ
ちゃい精霊は

その眷属、確かに存在^いしましたが自我も霊力もなくて『命』とは見
なされません」

はいはいメモって。じゃ次。

「『マラヲレは自身の役目を終えて大地に還り、大地は【歩^ヒむモノ】
を創り出した。

それこそ我らが人間の始祖であり始源である。』…むう大地「マ
ラヲレじゃないんですか？」

「ええ地の化身マラヲレはあくまでも父たる太陽神フアンドラと母
なる月の女神ルーネから

受けた恵みを『世界』に振りまくのが役目です。自らの意志を、
そして最後には自らの

身体でもってその役目を果たしました。なので大地はマラヲレ
の意志を継いでその恵みの

恩恵を一番受けたモノ、となります」

「ははあ…」

「納得するのなら取りあえずその納得をメモリなさい。さ、早く」

そして太陽が頭の真上に来た頃。

「そろそろ昼食にしましょうか」

… 待つてました！

今日は勉強会、という事で。(後書き)

せっかくの5話目なので設定を少し出すことに。
まあノリで決めていくのが多いので大したモノでもないんですがね。

本日は勉強会、ということ。夜。

『教師役』というのも案外疲れるものだな……。

ランプの灯りを元に照らされた部屋はこじんまりとしており、軍人らしからぬとは言い過ぎだが

文官や研究者の部屋といっても過言ではないほどには本に溢れていた。

そんな中で普段は『衛士』として勤めている彼は1巡りに1度だけの『教師役』の仕事を

現在はこなしていた。

次回の授業分を反復しながらどのように教えていくかシュミレートする。

「……。」

生徒は1人なのだがいわゆる『常識知らず』でこれがなかなか本当に、手強い。

例えば。

召喚儀式の間はその魔力の純粹性を保つために壁・床そして扉にも特別な技術が

使われており、それは中の魔力が溢れることはあるけれども外からは入り込むことがないという仕様。

そんな扉を、生徒…召喚師はことあるうか蹴破ったのだ。

賊が来ようともしくともしない扉、唯一の欠点は内側からの衝撃に

弱いということだ。

そのまま皇太子殿下の所へ走り去るし、でもって捕まえて理由を聞けばなんとまあ。

『みてみて見てこれえー！　あり、うんうん『蟻』っていう虫なんだけどね『勇者』が』

5秒前にプチッとした虫なんだ！　5秒だよ5秒！　『世界』を捉えるのは3回に

1回は出来るようになってたんだけど『時間』がここまで縮んだのは初めてだよ！

これはご褒美モノだよね！！』

キラキラした瞳は本当にそう思っているようで。

そして容赦なく脳天チヨップが皇太子殿下直々に下された。

『いったーい』

『んなわけあるかボケ。　さっさと『勇者（人間）』を喚^よべ。　そ

してまなイ…』

『テメえの性癖なんぞ知るか！あ、間違えた。　てめえの都合なん

ざ知るか！』

『それ本音だよな？前者かつんぺきに本音だよねオイ。　待てやゴ

ルアアアア！！』

『へ、陛下』と呆然とする護衛騎士をよそに、彼は技術部に扉の修復を要請した。大至急、と。

…何かが零れるわけではないが、つい目頭を押さえた。

例えば。そんなこともあったと何故か思い出した。

召喚師は極めてマイペースで何度も言うが『常識知らず』で。異世界から特定の条件に当てはまる人間を召喚する、なんていうのは片手の指で

数えられるくらい…もしかしたら召喚師1人かもしれない。

しかもそんな召喚儀式を1日3回を毎日…本人は平気というが皇太子殿下からの

勅命を受けたのだ、成し遂げるまで開放は望めないだろう。

なら召喚師の待遇がもっと良くてもいいではないかとも思うがなんというかソコは

護衛騎士の眩きによると「殿下、ツンデれ属性があるのです」だそうだがよくわからない。

ああ話がすつごくズレた。戻そう。

1日3回の召喚儀式は2回目と3回目に間があり、いつもなら昼寝や衛士の訓練風景を見たりして

時間を潰しているのだがその日は1回目と2回目の間、つまりは午前中に見学をしていて。

午後の暇な時間は昼寝だと夜眠れなくなるということでは何をして暇を潰そうかと悩んだよう。

で、何を思いついたのか常人には見ることも感じることもし出来ない精霊に唆されたのか。

おそらく後者だろう…何せ精霊の力を借りて他人から姿を見えなくしたのでから。

あれも大変だった…訓練を終えて召喚儀式の間にいると思っていた召喚師の姿がなく、

慌てて皇太子殿下の元へ行き『召喚師搜索命令』を発令してもらったのだ。

事情を知る者だけが探し回っても見つからない。

研究室に籠りっぱなしの魔術師にも加わってもらったが見つからない。

で、結局日が沈みきって全員疲れ果ててぐったりとしているところにひょこつとてかにゆつと出てきたのだ。

『何だが皆大変そうだから手伝いに来たよ？』

崩れ落ちる者、衝撃で固まる者、掴みかかろうとする者。

だが誰よりも早く反応したのは勇者が召喚されないと困る皇太子殿下だった。

『お前を探してたんだっつーの！！ 何一人勝手にかくれんぼしてくれてんの！？』

『かくれんぼだったのか！ 『もおいいかい』って聞こえていなかったから無効だよね！』

『始まつてもいないし終わりだボケえ！！ さっさと召喚でもしてこい！でそのまんま寝ろ！！』

『晩御飯抜きー！？』

『きつと明日の朝食が美味しいだろうな』

『ホント！？』

『……………』

キラキラした瞳の召喚師以外誰もが固まった。

唯一動かないといけない皇太子殿下が絞り出すようにこう答えた。

『…多分な』

そして部屋に戻るねーと手を振って去った召喚師を追って衛士もその場から離れる。

ちらりと後ろを見てみればとてつもなく疲労感が漂っていた。

…何だか込み上げてくるものがあって、肺の中の息を深く吐いた。人はそれを『溜息』という。

そうだ。

その翌日皇太子殿下に呼ばれて行ってみれば「アイツ色々ダメ過ぎるから1巡りに

1回でいい、色々と『常識』を教える」と言われたのだ。

いつの間にか俯いていた顔を上げて開かれた教科書を見やる。

ああ疲れているのだろっ、文字が見えない。

衛士はふらりとベットに倒れ込んだ。

姫サマが会う

「ふむ、やはりこちらは『色』が溢れておる」

人間の大国ローザライド王国の皇太子殿下の正妃確定、な魔国大王
1人娘シファンリーナ、

愛称リーナは数度目となる訪問に気楽に従者などを特に付けず人間
の国の王城内にある広大な
中庭を散策していた。

戦争時ならともかく協定が結ばれた今なら自分を殺めようとする者
は表立っていないだろう。

まあ、大抵の者なら勝てる力も自信もあるというのが8割占める理
由なんだが。

リーナは人間そのものはどうでもよかったが、人間の土地にある植
物は好きだ。

魔国には高濃度の魔力が空気に含まれているためか植物は過剰に大
きかったり
固かったり…見てて気分を悪くするものばかりだ。

勿論それが植物の生きる上の進化であるのは知っている。

しかし高位の魔人ともなれば自我は勿論感情や情緒といった『心』
というものが

発達し、魔人の中でも年齢的に『オトシゴロ』なリーナは外を見る
のが嫌だった。

なので。

なのでなので。

自分が人間の国に嫁ぐと通信で宰相から聞いた時、ひどく『心』が荒れたものだ。

内面が現実化しやすい魔国でそれは周囲を害する。

生憎というか運良く側にいたのは自称Mな下僕だったのでむしろ喜ばれたのだが。

「……………うむ、奴のことは忘れよう」

きつと、ついてくるのを阻止するため（奴の希望で）亀甲縛りで縛り、（奴の希望で）吊るしたので

今頃悶えているだろう。

「……………忘れるべきだろう」

さて。

と、気を取り直して。

周囲を見渡す。

特に行き先を決めていないし、婿殿（確定）とは夜食会にて顔を合わせる。

只でさえ父上が迷惑をかけているのだ、忙しい婿殿の時間を無駄に割いてもらうわけにもいかない。

それまでの時間潰しだがあまり人間と接触するのは好ましくないだろう。

自分がどう思っているかと3年ほど前まで戦争していたのだ、特にココにいる人間は

我ら魔国のモノを恨んでいるのが多くてもおかしくない。

…とまあ、そんな『言い訳』なんて置いといて。

『自由』なのだ。

大王の一人娘であるし高位の魔人であるからか、周囲に誰もいない

というのはそれほどない。

それに特にどこかへ急ぐ理由もその行き先でさえ決まっていな
だから『自由』なのだ。

だから、自然と前へと進む。

だから、『心』が躍る。

初めて味わう不思議な高揚感に戸惑いつつも歩みは止めない。
止める理由がないのだから、仕方ない。

そうして植物が繁る中、真っ直ぐあるヒト一人分幅の石畳を進ん
でいくと前方に

分かれ道があるのを見つける。

右か左か。

緑の茂みのせいでその先に何かあるのかはわからない。

ただ行き止まりに左右を示す看板があるのみで特に説明もない。

それに加えて何も考えずに歩いてきたし、地図もない人間国の王城
の建物の配置なんて

知るはずもなく…見当も付かない。

そうでなくては、『面白く』ない。

自然と弧を描く口元を自覚しつつ、直感のみで『右』に決める。

何かあるのか楽しみで、何もなくても楽しいだろう。

あと一歩でその先が視界に入る…そんな時。

「おわぶっ!」

「む?」

胸部を中心に何かがぶつかった感触。

ソレは自分に弾かれたように転がる。

ぶつかってきて跳ね返るとは…何と弱い人間だろう。

リーナは高まった気持ちのせいかな少しでも『憐れみ』を感じてしまったせいか、手を差し伸べる。

何と弱い人間のために。

「ほれ、さつさと立ち上がらんか」

何と弱い人間：目の前の子供のようなその人間は「いててて」と顔を押しさえている。

そして大きく真ん丸なその瞳が押しさえた指の隙間からリーナを見つけた。

溢れる高濃度の魔力。

高位魔人の持つ威圧感。

普通ならば、恐れるだろう。

差し出した手は未だに空気を掴んでいる。

…しかし何とつかまあ、その人間は『普通』というカテゴリーに組することが出来なくて。

「あれ？ 何で目の前にまな板があるんだろう？」

その禁句キーワードにリーナは、キレた。

姫サマが出会う（後書き）

衛士「全く少し目を離すところだ…」

儀式の場から消えた召喚士を探していて周囲を見渡したその時、

ドーン！

紫の落雷が青天の中、一直線に落ちた。

あまりの衝撃に離れたこの場所までビリビリと振動が伝わる。

衛士は思った。

探し物はおそこにいる。

そして誰かが（精神的な）被害を蒙ったのだ、と。
ダメージ

友が叫ぶ

『モグラ塔』

そう外の人に呼ばれ、稀に中の人もそう呼ぶ部屋、というよりは1つの研究棟。

王城敷地の隅っこで日夜魔法具の研究・製作・実験を行うそこは研究者としては

エリートコース間違いないのだが1度入ると何日も、何週間と出てこないのだから、
そう呼ばれる。

実際は地下施設のほうが地上より遥かに大きく、王城や城外に用があつた場合

無許可で作られた地下道を通るので最低限の人にしか見かけられないだけなのだ。

そんな場所では召喚師曰く蟻の巣のように張り巡りされた、地下の1室で

アポロ・ドロップなんていうほんのちよっぴり可愛い名前前の敵ついおっさん(38)が『ボス』として檄を飛ばすなんていう光景が日常だったり。

「おらソコソコー!!腕が上がっていない!ちゃんと上から打たないと形にならんだろうが!」

「ういっす!自分ジールク・カシジユマっす!!」

「研磨機使っているソコ!真っ直ぐ押し当てすぎだ!滑らせるよ
うに当てるんだ!!」

「りょーかいです！ エクシア・スコツシュです！！」

激と了解と自己紹介。

研究者と体育会系会話。

この組み合わせの悪い言葉が繋がるための説明は簡単だ。

『ボス』がとてつもなく熱血おっさんで、人の名前を覚えるのが苦手のため。

ただそれだけ。

前者はまあ人柄というか性格というかそういった人なんだろうで済むが

後者は途轍もなく酷かった。

現在は多少研究者たちの頑張りが見えてきたようで、前よりはマシになった。

副長のことは『マコロ・フェリスラー』（何故かフルネーム）と呼ぶようになったし。

しかし2人目は、まだ。

そこで我こそが！と研究者たちは自分の名前をボスにアピールしまくった。

デカデカと服に名前を書く者がいれば顔に書くものまで。

そして事件が起きた：がここではあまり関係ないので略、結果ボスに声をかけられた者は

返事と自己紹介するというスタイルに落ち着いた。

けど2人目は、まだ。

そんな感じな『モグラ塔』。

しかし「研究者」であることには変わらないので、あんなにアツかったボスも地上部分に

ある『所長室』で1日の3分の1は書類作業をしていることが多い。というのも。

実験成果報告書、資材使用許可書、魔力式考察書、資材発注申請書
…あらゆる書類によって

部屋は埋め尽くされ、その処理に追われているためだ。

副官のマコロ・フェリスラーによる簡易チェックを通し、不備の書類を抜いたとしても部屋を

埋め尽くすほどの量。

ポストとしては部下の指導に割く時間がモノ足りず秘書なりもう1人ぐらい書類を扱える人間が

欲しいが、魔法具というジャンルは機密事項が多く許可が下りない。

…どうすればいいかと色々考えたが指導時間に不満があるものよりはり自分が所長として

頑張るしかないということ結論に落ち着いた。色々あって人材が足りないのだ、結局。

コンコン。

ポストことアポロ・ドロップは部下からの実験考察書を読んでいる途中、訪問者によってそれを

止められた。

副官のマコロ・フェリスラーならノックは3回。

しかも彼ならその後「失礼します」と入ってくるが、それが無い。

「城のヤツか…：勝手に入っただけぞ」

前者の呟きが聞こえてもどうも思わない。どうせ他とはそんな間柄だ。

上げた視線をもう一度下げた時、ドアから人が入ってくるのが視界

の端で見えた。

足音のほかにガチャガチャと聞こえるのは帯刀しているのと鉄製の保護が付いた靴のせいだ。

…ヤな予感がする。

視線を上げたくないがそんな我侭通じるのは小さいあの友人（多分）だけだ。

「何だ？ 見たところ學術のヤツではないようだが…」

軽装の防具を付けた兵士。

始めて入る『モグラ塔』にやや緊張気味だが己の使命を果たそうと口を開く。

「っは！ 自分は第4師団ダンドリア隊長からの使いであります！

至急、【無の鍵】の修理を、との言伝をお預かりして参りました！」

第4…ふむ、アイツのトコか、で、【無の鍵】の修理、と…

「…ナニイ？」

「はっ？ じ、自分は【無の鍵】の修理としか聞いておりませんので…」

廠ついボスの腹からの声に兵士は一步下がる、そしてボスの顔を直視した途端

では！と逃げるように所長室を出て行った。

【無の鍵】。

召換の間の扉の錠。

どんな鍵にも合わず、魔術を打ち消す式と魔力を無力化する鉱物が組み込まれた

研究棟初の特A級クラス認定をもらった魔術具である。

錠ではないのはそもそもコレ自体が錠でもあるため、施錠方法は国家機密に値する。

それが、壊れた。

どうしてなのか誰なのか思い当たるといつか想像は容易く付く。

何せ友人（多分）だから。
だから。

「ぬわんでことしてくれんぢゃワレーーーーッ！……！」

友は叫んだ。

後日。

当人（召喚師）には聞こえなかったものの、聞こえた別の人物によつてこの叫びは

『モグラの嘆き』として王城内に広まり、一部の者から同情の眼差しが送られたとか。

友が叫ぶ（後書き）

休みがまともにならないとは…：どういうことだ。

構想時代は大分前から出来ていたのでちまちまと書き続けて…

ようやくできました。

キャラクターによって扉と鍵の価値が違うのは故意です、知っている人と

いない人がいるので混乱しそうですがどっちも特注品なのは間違いないです。

友は頷いた

天候は良好。

頭上に広がる青空は爽やかな気持ちに、降り落ちる光は穏やかにしてくれる。

こんな時にはついこう口にしてしまうもんだ。

「みゃー」

愛用のブカブカな藍色のローブはほかほか。

鎖骨辺りからちらりと特注の下着も見える素肌はひんやり。

膝上30センチから開かれた裾は後ろに靡き、足元の屋根スレスレを舞っている。

ああ足を投げ出して寝転びたい。

しかし今はちよつとした気分転換の休憩中で。

おそらく暇しているであろう友人を捕まえて駄弁ろうかと思つていて。

「んーどうしよっかな…」

仕事く駄弁りなのは当然。

彼女はとにかく目的の友人を捕まえることにした。

失敗したら寝ればいいし成功したら駄弁れば良い。それでいい。

「……1の術式展開。『待機』と『継続』の術式を付加…『起動』」
風を流し続ける。

こうすれば友人の私の知らない友人がここを報せるだろう。簡単な釣りだ。

きつとやつほーと喰い付いてくる。

「ひゃっほー！」

「つよつす」

…少し外した。

けれど目的達成には違いないので魔術式を解放する。

「ヒマなんだよねどうしたのー？」

「だと思つて駄弁ろつかと」

「名案！ にゃーちゃんはイイ子！」

「…みゃー」

「いやいやにゃーでしょあれは」

「みゃー、なの」

「にゃーにゃーなの！ ホラ、この子もそういつているし」

「ノーカンだコラ」

駄弁り始めから何を言うんだこの友人は。

アレは絶対に『みゃー』であつてそれ以外は認めない。

「むー相変わらず頑固だね」

「キミに言われたくないな、この頑固者」

「へへーそれほどでもー」

照れるのは自覚しているので良しとする。

青空を見る。

「ああそう言えば。 アポロがこの間怒っていたが何したんだ？」

「ドロップちゃん？ あ、扉の鍵壊しちゃってねーそれだけだよ？」

「そりゃ怒る。 私は別に怒りもしないけどちゃんと謝った方がいいよ？」

あの鍵アポロがキミのために作ったんだから」

「そうかーちゃんとかー… 『誠意』的な？」

隣でしゃがみこみどう謝ろうかと悩む様子を視界の端で留まらし、
これから突撃するかもなモグラ塔の方を見る。

ここ『学師院』の屋根からでは距離と木々によって見えるはずがない。

まあガンバ。

そんなちよつぴりな気持ちで見ていると、人影が本気走りでこちらに向かつてくるのではないか。

立派な引きこもりのココのヤツらがあんな走れるわけがないしそもそも1人で堂々と移動して

いるのだ…そして段々と近づいてくる人影は彼女が良くは知らないが一応知っている人物だった。

目当ては勿論、隣の友人。

未だに悩み中の友人は気付いていない。

しかしまあ隠す理由もハイと渡す理由もない。

つまり自由。

「1の術式展開。 『流動（フユ）』 の術式を付加、 『起動』^{オープン}」

「……ほわ？」

友人を流し渡すことに決定。

向かってくるどうでもいい人影と話すのが面倒、ただそれだけ。

目的である友人を手に入ればこちらなど目も向けないだろう。

「じゃね」

風で流される友人に次回何か言ってきたら謝ればいいやと別れのみに口にする。

一方友人といえは驚きはしたがすぐに笑顔になり、手を大きく振った。

「じゃーねーまたねー 『みゃー』 ちゃん！」

「……」

人影が慌てているのが見えた。

けれどそれはどうでもよくて。

咄嗟に何かを言おうとしたが声が出なくて。

少しばかり飛んだ意識が戻ってきた時には既に人影が大きくなっていった。

「……」

じわじわと温かい気持ち^モが溢れてきた。

彼女はくるりと右に反転。

そして空を見上げようとして、止めて。

「みゃー……」

「イイ天気じゃないかコノヤロー。」

友は頷いた。

友は頷いた（後書き）

基本的にこのお話ではフツ　な人を出さない予定です。

今のところ性格的にリーナがそれっぽいですが残念ながら126歳の乙女ですし

まな板っ娘ですから。

次は…今話と同じ魔術師さんのお話、です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4522u/>

勇者よ、早く来やがれ！あ、いや来てくださいお願いします。

2011年10月12日00時50分発行